大分県芸術文化振興会議会報

芸振

No.25　49. 12

発行所・大分市府内町　県教育庁文化課内　県芸術文化振興会議事務局
発行人・米田貞一　編集人・矢野朔雄

県地方史研究会

当時は苦しみの連続

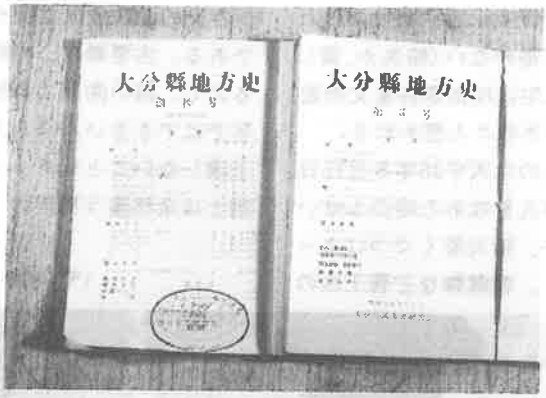
ことしは創立20周年

渡辺澄夫

県地方史研究会常任委員長・大分大教授

戦後これまでのお国自慢的な郷土史に対する根本的な反省が行われ、独善性・封鎖性・擬科学性を脱却して普通妥当性を有する郷土史の要請が強くなり、「地方史」の提唱が行われた。新しい地方史は、日本歴史と対立する存在ではなく、それを構成する基礎単位となるものでなければならない、とされた。

このように地方史の研究が日本歴史研究の基礎であり出発点であるとする考えから、地方史料の探訪が盛行し、若い学徒が農村研究に真剣に取り組むようになったことは、画期的な転換であった。



「県地方史」創刊号と第3号

県市町村ごとに全国的に史談会や町村史研究会が発足し、それらを統合する全国規模の地方史研究協議会が発会する気運の中にあって、わが大分県でも後れながら会結成の運びとなった。故立川輝信氏の協力を得、発起人会を開いたのが昭和29年の春ごろで、6月26日に町村会館で発会式を挙行している。年会費 250円、創刊号は1・2号合併で10月末にようやく発刊した。会員募集のために私費で増し刷りを作って配布したりしたが、意外に部止りが悪く、のちのちまで経営に苦しみ通しであった。しかしこの 100頁余の雑誌を発行し得たのも、立川氏以下委員の努力はもちろんながら、三恵社長高井久雄氏の犠牲的協力の賜であった。当時は1頁単価80銭という驚くべき安値であったが、それでも2万円余を支払った計算になる。

会員数が少ないので、3号雑誌ともかげ口をたたかれた。雑誌送付の封筒がないので、一度送付されてきた雑誌等の封筒を張りつぎして用いたし、また便にことずけて送料節約に苦心した。時にはあずかった人が忘れたり、届け先が遠いのでそのままになったりして届かず苦情のでることも一再ではなかった。日常の庶務・会計や雑誌発付事務等は、小生が一人でやった。その煩雑さにこの仕事の意義を疑いたくなることも一再ではなかったが、継続ということの意義を自らにいいきかせてトボトボと歩きつづけた。こうした時、新崎長功君、佐藤満洋君らが会費徴収、発送事務等を援助してくれたことは、この上もなくありがたかった。

31年12月に10号記念特集を出したが、当時別府来遊中の岡本良知氏が沖の浜陥没の事実を明らかにした論文を寄稿したことは画期的であった。その後「別府特集号」、「大友宗麟特集号」等を出し、好評を博した。36年度から県社会教育課から県費補助金を得るようになり、経営はやや安定した。この頃毎日新聞社大分版に「大分県の歴史と文化」を連載し、のち単行本として出版したが、またたく間に売り切れた。

昭和38年は会発足10周年で記念事業として「大分県地方史料叢書」出版計画を打ち出し、まず「豊後国村明細帳」を毎年1冊あて出版することにした。この年の会員数は 158名前後で、現在の半分よりやや多い程度である。委員半田康夫氏の逝去もこの年のことである。10年もするとマンネリ化し、いろいろのトラブルもないではなく、会運営については、この頃が最も苦しい時代であったように思いおこされる。

[redacted]

県文化財　あの頃あの時

古要舞保存会

昭和31年に国指定

藤　永　義　高

県芸振会員・元中津教育事務所社会教育指導員

中津市大字伊藤田字洞の上部落(旧三保村)52世帯の氏神様が古要宮で、部落中央の鎮守杜にまします。祭神は息長足姫尊、虚空津比売命を祀る。

大祭は毎年10月12日であるが、太陰暦の閏年の大祭には「古要舞」「神相撲」が未婚の青年によって奉納される。このくぐつ（木製人形）60体と、舞・相撲が、国指定重要文化財として、昭和31年４月26日に指定された。

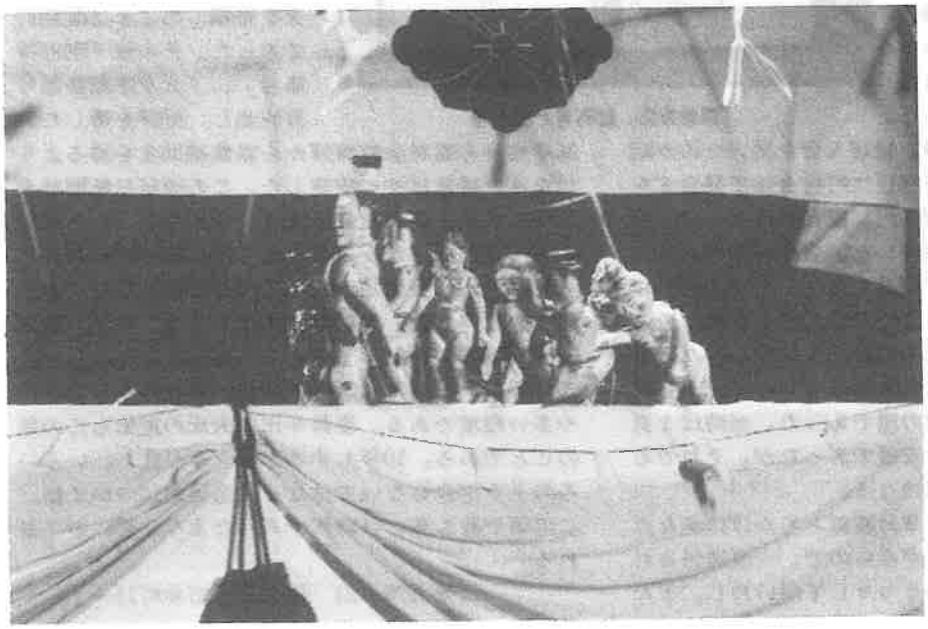
保存会というと現代式に考えられるが、洞上部落は旧三保村舌状丘陵の袋谷の部落で、東西の丘陵には古墳群、横穴古墳群が群在しているので、縄文、弥生の昔からあったと思われる。それだけに古い歴史の流れがそのまま残っているが、古文書がない(紛失か、貸し忘れか）ので、故半田康夫先生は民俗資料重文指定内申資料さがしに、随分苦労されたと思われる。

宇佐神宮放生会が始まったのは天平16年８月15日。今の和間の浮殿で、大隅、隼人を攻めた時のふぜいをまねて、竜頭、鵜首、獅子、狛犬等くぐつによって、船上から種々の曲を奏し、菩薩舞など皆上古の形態を演じたという。これがずっと続いて残っているので、放生会が中絶してから、閏年だけに奉納上演するしきたりになった。

くぐつはでく（木偶）ではない。古要宮では「神様」（くぐつひめ）である。平安時代からのあやつり人形とはおよそちがい、古要舞、神相撲を演ずる「御神体」そのもので、くぐつ師はよど（おおみそか）に若衆入り（15才になった男）があり、そこで未婚のよとり（長男）８名がオドリコ（くぐつ師）として、大体きめられていたらしい。閏月のある年の大祭１ケ月前から、オドリコとはやし方（笛、太鼓、チャンカラ）は楽屋に泊り込んで（男料理）、演奏のけいこをしたという。

近年過疎化して若者の少ない洞上部落では、宮総代と組頭（４人）が、中学生、高校生（男のみ）をあつめ、10日前からＯＢ（かつてオドリコをした結婚者）の手ほどきを受け、12日の古要舞にそなえる。保存会の問題点は芸能そのものよりも「笛の吹奏者」である。古要舞も、神相撲も笛によってリードされるので、笛の曲がここ独得で、この習得は１年や２年ではできない。今３人の若者が特訓中だが、毎年上演しないこともあって、本調子にならない。神楽笛とは全然違う独得のリズムであるから。

（筆者は古要宮氏子の一人）



渡辺信幸氏撮影

昭和46年10月12日

（神相撲の住吉様（西方）と祇園様（東方）のすもう）

北原人形とは全然ちがい、芸能そのものはそんなにむつかしいものではないので、保存には心配ありません。

50年前までは神事としてしょうじんけっさいしてよとりがえらばれたわけですが、ただ今は８人のオドリコをあつめるのがやっとです。52世帯からどうにか８人はあつまります。

こまるのは笛です。ただ今の指導者真辺武（64歳）がふけなくなるとあとがいません。かといってテープレコーダーでの演奏は神事違反ですから考えられないのです。

佐伯史談会

16年間の積み重ね

羽柴　弘

佐伯史談会副会長・佐伯市文化財調査委員

佐伯史談会は、芸振の中に加わってはいるものの、ほとんどこの10年間、統一的行動（例えば芸術祭の如き）に参加出来ぬまま過ごし、まことに相すまぬと思っている。

「佐伯史談」と題する、わずか30ページ前後の謄写版ずりの機関誌をご覧になったら、「ホホウ、こんな会があるのか」と、その薄っぺらさ、その美しからざるガリ版ずりに、まず軽く見すてられそうな、そんな代物である。

しかし地方史研究、郷土に関するもろもろの学習に、これまで一貫して16年間地道に努力をつづけ、その成果の記録の積み重ねは、見なおしていただけると思う。

佐伯における郷土史の開発は、遠く明治年間の佐藤鶴谷にはじまり、大正・昭和と進展し、終戦後増村隆也が現代史観に基づく軌道修正を行い、昭和33年の春その後をうけて佐伯史談会が発足した。当初は30名そこそこでのスタートであったが、特筆すべきは個人プレーでなくて、あくまでこの道を志す同志の結合で、一しょに歩いては忘れ去られている歴史の跡をしらべ出し、一堂に集まっては研究調査の結果を発表検討し、それらを毎月発行する機関誌「佐伯史談」に登載発行することとした。だからこの16年間の積み重ねというものは、大層な量に達している。

しかし、会員はみんなそれぞれ仕事をもっている。その仕事のかたわらの、趣味による、あるいは郷土愛に基づくことであるので、会の組織が充実成長したとは言え、その運営は順調とばかりはいかなかった。どうかすると、研究集会や現地調査の会をやっても、参加者は10人前後ということも度々であった。機関誌の発行も、いろいろ支障があって二カ月に一度ということになったり、それだけに苦労が多かった。そのような状態の中で、地域の人たちの理解や協力が集って、今ではかなり大きな仕事も出来るようになった。今進行中の佐伯城三の丸櫓門の修復工事などは、その最たるものである。

現在、普通会員が 273名、賛助会員と客員が 115名、ほかに会友が20名、合せて 408名という大世帯であるので、「佐伯史談」は 425部印刷している始末である。

しかし、芸振の事業にソッポを向いているわけでは決してない。いつも考えているのだが、郷土の生んだ芸術家たちの遺作展などを計画的に打ち出し、書画工芸、民芸、芸能などについての展観や発表など、佐伯地方を主としたものだけでも、十分考えているつもりである。

[redacted]

県史料発刊

戦後の荒れ果てた中で

中野幡能

県文化財専門委員・県芸術短大教授

東京に帰ろうか、このまま大分にいようか、復員してから数年間は思い悩んだ。だがどうしても捨てきれなかったのは宇佐八幡の史料整理であった。恩師小野精一、宮地直一両先生の遺した仕事を完成したい、これは学生時代からの夢であった。

職を現地に求めて、傍らこの仕事に打ちこんだが仲々進まない。漸く宇佐郡史談会で出版計画が立ったのは昭和23年であった。当時できた許りの西日本史学会や史学会、宗教学会などに何度か応援を頼んだ。当時私は田舎町の文化連盟の会長というのにまつりあげられ、荒れ果てた戦後の復興運動のために文化行事の世話をしていた。大分合同新聞の清原宣雄論説委員に何度か講演して頂き、話題になったのが、私の宇佐文書出版のことであった。これが後に大きなご後援のきっかけになった。

その頃、大分県高教組ができ文化部長は津野任氏であった。私は宇佐文書販売の応援を頼みに行ったら、津野部長は即座に＜大分大学か教育研究所でないとやれんぞ＞ということであった。大学はできた許りであり、教育研究所はそれからできるということであった。全く予期してなかったが、今仁勝氏や中道宏氏がしきりに教育研究所に行けと勧めて下さった。飯田忠教育長、米田貞一教育課長にお目にかかって研究所に入ってしまった。小池喜代蔵、岸野晋一、森田俊男の諸氏と一緒だった。

教育長が所長で課長が副所長であった。＜大分県のためになることなら何でもやれ、教育研究所の名が新聞に一行でも出るような仕事をして欲しい＞ということであった。私は『宇佐古文書集成』の印刷中であった。恐る恐るこの仕事を小池主任に話してみた。こうして『大分県史料』の仕事は生れた。しかし、それまでの印刷を中止したので損料はボーナスで自弁せねばならず、家庭的には大変だった。

ところがこうなる迄には多くのエライ方々が相当動いて下さった。そのため長い間白い目でみられたり、10年余りのこの仕事は冷汗の思い出の方が多い。しかしいつも思うことは、当時の教育長、学校教育課長、同僚たちは＜えらかったなあ＞という事だけである。

[redacted]

豆知識

銃砲刀剣類の登録

美術品としての刀剣類は県教育委員会で登録しなければ、警察から不法所持として処罰されます。刃体が6㎝を超える刃物の内、刀剣、やり、なぎなた等が対象になります。これらと古式銃砲（火なわ銃、火打ち銃、管打ち銃、紙薬包式銃、ピン打ち銃）も同様に登録が必要です。

佐伯市下城遺跡発掘

ノルマ、合宿、銀めし

賀　川　光　夫

県文化財専門委員・別府大教授

ツギハギだらけの背広にチョウネクタイ、海軍の将校靴の左の底がはげて、歩くと口をあけて大きな息をする。これでも当時は全くの紳士スタイルで文部技官斉藤忠先生は佐伯駅におり立った。

当時中国東北地区から帰還されたばかりの八幡一郎先生（当時東京大学講師）は、縞のズボンに黒の背広をつけていたから最高のいでたちであったが、靴は陸軍の兵隊靴で、歩くとザク、ザクと音がじた。朝鮮から引きあげたばかりの有光教一先生（後京都大教授）と鏡山猛先生（後九州大教授）の２人はともに終戦と同時にルンペンで、兵隊服と兵隊靴、鏡山先生はグルグル巻のゲートルをつけていた。

昭和23年春、暗い日本の戦後、九州では２度目の学術調査が、佐伯市下城遺跡を舞台におこなわれ、日本の考古学界有数の面々が、こうして参集したのである。近頃のように、開発のため、遺跡がやたらと調査されてくると、考古学もよい意味での大衆の学問になってきた。だがいつの間にか考古学者になったつもりの人達が、この道数10年という学者に批判をかけるという輩がやたらと多くなって、いずこもやりにくい世の中ではある。

大正末の生れ、戦争に間に合って、儒教を身につけられ、なんともはや損な生き方をした世代のわれわれ。戦争で中断して学問に飢えていた先輩達が、この時とばかり後輩の尻をたたきにたたく。下城遺跡では大家４人に私１人、毎日１人づつレクチャーをうけても、こちらは連日で身は痩せるばかりであった。ある時思いあまって石斧を「エーイ」とばかり投げつけたら真中からポロリ、この時ばかりは直立不動で恩師の小言を聞かねばならなかった。

昼は発掘、そして先生達の眼の色をうかがってはウロ、ウロ。土器や石器を水洗いして、白い絵具で番号を入れる仕事は夜の私のノルマ。ノルマという言葉は、戦後の流行であったが、私はこの言葉、流行と同時に嫌になった。つらい、つらい修業であったがそれでも楽しさもないわけではなかった。そして私が、どの先輩よりも負けないことが１つ、この調査の合宿にあてられた寺は、大そうな水田をもっていて、おかげで銀飯がテンコ盛り食えた。私の胃袋はたえずグウグウなりどおしで、飯の時間だけは先生方を圧倒に圧倒することができた。この時の大飯食いから頭のテッペンに禿の変調がみられたようである。

20年・30年代の発掘

暑さにへたばったことも

入　江　英　親

県文化財専門委員・県文化財管理指導員

鹿児島県に勤務中の私に帰県を促してくれたのは、学生の頃考古学に熱中していた私を知る大分県庁のＦ氏である。終戦後、遺跡の発掘調査熱が次第に高まって来て、調査員の人手不足を感じて来たからなのだろう。しかし諸般の事情でそう簡単に抜け出すことも出来ず、23年の８月31日付で、やっと「大分県へ出向」の辞令がいただけた。東大のＹ講師を迎えて、佐伯の長良貝塚を発掘していたのがその頃だったと記憶する。

当時の史跡名勝天然記念物の係長は元気溌剌のＦ氏で、話しも大きいが、Ｆ学説では中央の大先生にも１歩も譲らぬ剛直さ。僅かな県費で次々に大きな調査を実施し、しかも毎年立派な報告書を出版した功績は誰もがたたえている。反面調査員の負担は大きかった。「宿泊の食事は味噌汁と沢庵があればよい。調査参加の学生は自分の勉強のためだから謝礼無用」これがＦ氏の持論。しかし28年真夏の早水台遺跡の発掘では、暑さにへたばったみんなの姿を見かねてか、付近の畑から生姜を２・３本いただいて、これを肴に夕食に焼酎１本がついたこともある。

「渡り鳥今年は丹生の川を掘る」これは35年丹生川遺跡発掘の際の熊本女子大Ｏ助教授の寄せ書きである。発掘には常に九州各地から各方面の学者を、薄謝でお招きしたものである。丹生川遺跡は弥生の水田遺跡として調査を始めたが、掘れども掘れども粘土ばかり。九大のＯ助手は、寄せ書きにこう書いた。「汗１斗掘った粘土は山をなし、茶わんに棒切れ丹生の名物」茶わんも棒切れも近世の新しいものばかりであった。結局九大のＫ教授はおもむろに条理制の調査に切りかえて報告書も立派に整った。27年の小六洞窟の調査も、余りパッとしたものではなかった。その点慶大Ｅ講師の寄せ書きにもうかがえる。「期待はずれの小六洞」

20年から30年代にかけては、にわか考古学者の乱出時代。犯人があがりそうで遂にあがらなかった富来の狐塚を始め盗掘が続出し、これが40年代の文化財破壊と盗難の時代に続くことになる。

下山古墳・安国寺遺跡・小六洞窟・名草台遺跡・虚空蔵寺址・七ツ森古墳・法鏡寺址・宇佐弥勒寺址・藁葺遺跡・内田砂丘遺跡・小池原貝塚・七双子古墳群……等、私の関係した調査だけでも挙ぐればきりがない。中でも余り顧みられなかった緒方と山香町の石風呂が、国の重要民俗資料に指定されたことは楽しい思い出である。そのうち複雑な考古学界の裏面史でもまとめたいと思っている。

大分県教育委員会刊行文化財関係出版物一覧

年度	冊数	事項	内容	備考
25	0			
26	1	指定文化財一覧	「重要文化財史跡名勝天然記念物一覧」	
27	3	史料目録 調査報告書 調査報告書(1)	「大分県古地図目録」 「北原芝居」 文殊仙寺の梵鐘・オトメクジャク等11篇の小論	
28	1	調査報告書(2)	伊美町鬼塚古墳・垰原マツ等6篇の小論	
29	0			
30	1	調査報告書(3)	「早水台」（早水台遺跡発掘調査報告）	
31	3	調査報告書(4) 調査報告書(5) 行政資料	七ツ森古墳・山蔵のイチイガシ等5篇の小論 上代の宇佐地方・三基の国東塔等4篇の小論 「文化財関係法令規則集」	
32	2	写真集 指定文化財一覧	「大分県の文化財」第1集 「大分県文化財一覧」	
33	0			
34	3	調査報告書(6) 写真集 指定文化財一覧	四基の国東塔・自性寺の大雅堂障壁書画等4篇の小論 「大分県の文化財」第2集 「大分県文化財一覧」	
35	1	調査報告書(7)	「弥勒寺遺跡」（発掘調査報告）	
36	2	調査報告書(8) 指定文化財一覧	「七双子古墳群」（発掘調査報告） 「大分県文化財一覧」	
37	3	調査報告書(9) 遺跡一覧 行政資料	「中津市古要神社のくぐつ」 「大分県遺跡一覧」 「文化財関係条例規則集」	
38	2	調査報告書(10) 指定文化財一覧	「丹生川遺跡の調査」（発掘調査報告） 「大分県文化財一覧」	
39	3	調査報告書(11) 調査報告書(12) 写真集	「大分県の民俗」（民俗資料分布調査報告） 「早水台」（早水台遺跡発掘調査報告） 「大分県の文化財」	
40	1	指定文化財一覧	「大分県文化財一覧」	
41	2	文化財分布図 調査報告書(13)	「大分県指定文化財分布図」 「野間古墳群・横尾貝塚・小池原貝塚緊急発掘調査」	
42	3	調査報告書(14) 調査報告書(15) 指定文化財一覧	「大分県の民俗芸能・一」（吉弘楽・若宮楽等13民俗芸能の調査報告） 「中ノ原・馬場古墳緊急発掘調査」 「大分県文化財一覧」	
43	3	調査報告書(16) 調査報告書(17) 調査報告書(18)	「大分県の民俗芸能・二」（植野神楽、日岳湯立神楽の調査報告） 「黒山遺跡緊急発掘調査」 「大分県の民俗芸能・二」（藤江神楽、佐伯神楽の調査報告）	
44	3	調査報告書(19) 指定文化財一覧 写真集	「大分県の民俗芸能・一」（深山・犬山・玖珠の各神楽の調査報告） 「大分県文化財一覧」 「続大分県の文化財」	
45	2	調査報告書(20・21) 埋蔵文化財一覧	「稲荷山遺跡緊急発掘調査」 「宇佐市内駅館川大規模圃場整備区域内埋蔵文化財分布図」	
46	6	調査報告書(22・23) 調査報告書(24) 埋蔵文化財一覧 指定文化財一覧 写真集 入門書	「天瀬町赤岩・玖珠町北山田の民俗」 「御陵古墳緊急発掘調査」 「中津市内埋蔵文化財分布一覧」 「大分県文化財一覧」 「大分県の文化財」 「文化財保護の手びき」	※ ※
47	9	調査報告書(25) 調査報告書(26) 調査報告書(27) 調査報告書(28) 行政資料 史料目録 埋蔵文化財一覧 埋蔵文化財一覧 埋蔵文化財一覧	「耶馬渓町の民俗」（民俗資料調査報告） 「法鏡寺跡・虚空蔵寺跡」（宇佐市内古代寺院跡発掘調査報告） 「米水津村宮野浦の民俗」（民俗資料調査報告） 「飛山」（大分市大字東の横穴古墳群の発掘調査報告） 「文化財保護のしおり」 「到津・小山田文書目録」（古文書等緊急調査） 「大分市・挾間町埋蔵文化財分布一覧」 「国東町・武蔵町・安岐町埋蔵文化財分布一覧」 「豊後高田市埋蔵文化財分布一覧」	※
48	12	調査報告書(29) 調査報告書(30) 調査報告書(31) 調査報告書 調査報告書 史料目録 史料集 埋蔵文化財一覧 埋蔵文化財一覧 埋蔵文化財一覧 指定文化財一覧 文化財分布図	「傾・祖母山系におけるニホンカモシカの生息状況に関する調査報告」 「耶馬渓ダム水没地区の文化財」（石造美術・彫刻・民家・埋蔵文化財・民具の調査報告） 「立石貝塚」（宇佐市立石の縄文時代貝塚発掘報告） 「下黒野遺跡」（挾間町大字古野の遺跡発掘報告） 「宇佐風土記の丘・調査報告」 「到津近世文書目録」（古文書等緊急調査報告） 「大分県史料」第26巻（諸家文書補遺・2） 「杵築市埋蔵文化財分布一覧」 「日出町・山香町埋蔵文化財分布一覧」 「日田市・玖珠町埋蔵文化財分布一覧」 「大分県文化財一覧」 「大分県指定文化財分布図、分布一覧」	※

註1 「　」内は著書名であることを示す。
註2 ※印のものは、有料頒布品の在庫を示す。

大分県埋蔵文化財年度別発掘調査状況

年　度	発掘件数	事　　例
23	3	大分市般若寺遺跡調査、佐伯市下城遺跡調査
24	6	臼杵下山古墳調査、大分市井尻遺跡調査
25	2	国東町安国寺遺跡調査
26	4	安国寺遺跡調査、下山古墳調査
27	3	小六洞窟調査、森町千人塚古墳石棺調査
28	3	早水台遺跡調査
29	4	虚空蔵寺跡調査、弥勒寺跡調査、七ツ森古墳調査
30	2	大分松栄山古墳調査、別府市石垣遺跡調査
31	2	弥勒寺跡調査、中津市伊藤田窯跡調査
32	3	白潟遺跡調査、法恩寺山古墳群調査
33	4	田村遺跡調査、大恩寺遺跡調査、ワラミノ遺跡調査
34	2	弥勒寺跡調査、武蔵内田遺跡調査
35	2	弥勒寺跡調査、山香大原遺跡調査
36	3	七双子古墳群調査、小池原貝塚調査
37	7	丹生川遺跡調査、大石遺跡調査、丹生台地遺跡調査
38	6	川原田洞穴調査、早水台遺跡調査
39	7	黒山遺跡調査、水月寺跡調査
40	6	横尾貝塚調査、大石遺跡調査、小池原貝塚調査
41	4	中ノ原古墳調査、丹生台地遺跡調査
42	5	岩戸遺跡調査、丹生台地遺跡調査
43	1	御陵古墳調査
44	0	
45	8	法鏡寺跡調査、台の原遺跡調査
46	13	立石貝塚調査、雄城台遺跡調査、虚空蔵寺跡調査
47	18	雄城台遺跡調査、飛山横穴調査、台ノ原遺跡調査
48	19	ネギノ遺跡調査、京徳遺跡調査、雄城台遺跡調査

豆知識

地方歴史民俗資料館

各種開発事業の急速な進展と生活用式の変貌に対処して民俗資料および歴史資料・考古資料などを保存・活用し住民の郷土の歴史と文化財に対する知識と理解を総合的に深めることを目的として、市町村が設置し、管理は当該市町村教育委員会が行うものである。

県下では48年度に国東町が建設し、本年は安岐町が、来年は本耶馬渓町が建設の予定である。

文化財の種類

文化財には有形文化財・無形文化財・民俗資料・記念物があります。有形文化財には、建造物（木造・石造）・絵画・彫刻・工芸・典籍・書跡・古文書・考古資料が、無形文化財には、演劇・音楽などの芸能および工芸技術などがあり、民俗資料には有形と無形の民俗資料とがある、記念物には、史跡・名勝・天然記念物（動物・植物・地質・鉱物）がある。

＝会員募集中＝

大分県地方史研究会では20周年を記念して会員を募集中である。

入会希望者は、大分市旦野原・大分大学教育学部国史研究室内の同事務所へ申し込めばよい。

波紋

私は豊後高田地区文化財パトロール員

豊後高田市文化財保存会委員
県文化財保護指導員
岩　野　勝

県文化課は、文化財愛護モデル地区指定、文化財愛護の標語・ポスター募集、文化財指導者講習会や文化財教室の開催、文化財の修理、収蔵庫の建設や保護施設の充実、調査に基づく文化財指定、開発地域の緊急発掘等々の行事に精進されている。このことに対して感謝している。

県下六教育事務所管内の会場を順次巡る文化財指導者講習会は、出席者に各地の文化財の実態把握や情報交換・親睦の機会を提供し、文化財教室では、県文化財専門委員の講義によって、文化財に対する認識を深め、その地方の文化財保護推進に貢献し、後継者育成の機会を提供するよい催しなので、年次計画によって各分野の講義が受けられるように是非継続して実施してほしい。

パトロール結果、内野の聖観音立像、天念寺の釈迦如来坐像外四体、無勅寺の大日如来坐像外十四体の修理や富貴寺の大日板碑、笠塔婆の折損修理、元宮磨崖仏・堂ケ迫磨崖仏の雨覆施設は年次計画で実施して頂きたい。

修理には県が半額、市町村並に所有者・管理者が半額負担すると聞く。地域に特殊性はあろうが、過疎化の進む土地では、寺院檀徒や住民も少なく、経済力が低いため、保存対策の必要は認めても高負担を嘆くという現状から、地元の寄付協力が得易いように、県費の補助率を引上げる予算獲得を推進して頂きたい。

文化財保護について、地域ぐるみで取組み実績を挙げている市町村や団体の顕彰や文化財保護の認識を深めるためのシリーズ番組を編成して、県民普及に資し、文化財保護意識の定着を図るため、新聞・ラジオ・テレビのマスコミ利用を是非考慮してほしい。

学校教育への要望は如何かと思うが、田染中学校のあけぼの文化クラブの文化財保護活動は敬服に値する。他校に於ても文化財の探訪調査・発表の教育活動が活発に実践されることを願ってやまない。

（[redacted]）

ある報告書から

「米水津村宮野浦の民俗」

・迎春は一大行事であった

〔すす取り〕　12月13日にすす取りをする。雨が降っても掃除をしていた。畳替えをする家もあった。すす竹は正月15日のトンドに使うので、子供達が直に集めて回る。これから約1カ月間、西とハトの両部落で集めた竹を奪い合っていた。

小浦では12月の1～13日に、各戸ごとに家財道具を全部出してススハワキをする。その年に不幸があったり新築した家はしない。すすはき竹は竹やしいの木を使う。小学校6年以下の子供がすすはき竹を集めて回る。小浦はムカイ・ナカノムラ・ホンコウラの3つのジゲに分かれているので、正月14日のトンドまでに、他のジゲの子供から盗まれないように集めたすすはき竹を山や空家にかぎをかけて隠しておく。

〔ススハワキ祝い〕　小浦では13日にススハワキ祝いをする。麦を2～3合入れた赤飯を炊き、刺身・酢の物・煮〆などのごちそうを作り、不幸のあった親類のヤウチ（家族全員）を招く。お世話になった家には高膳で1膳を配る。

〔もちつき〕　24～5日ごろからもちをつく。一俵程ついていたが、多い家は二俵のところもあった。年の夜サまで乾燥させ、酒だるに密閉して保存した。水もちにすることもあった。鏡餅は1個が1升つきである。

〔正月だきもん〕　正月用の薪は数人で山を買い、20日ごろまでに作って、オオノボセにかるいを担い取りに行く。ウバベ（ウバメ）・くぬぎは豊かな家が買い、普通の家は雑木であった。ぞうに用のぞうにダキモンはしばで、2尺の長さに切り一尋の縄で束にして、ニワのツチ（ツシ）にぎっしり積み重ねる。

〔門松迎え〕　28日の朝、暗いうちに門松・船松のための松を伐りに行く。門松を立てるのは事業家・網方・商人などの大きな家である。

〔井戸さらえ〕　暮も押し迫った30日ごろに、宮の浦にある井戸（12カ所）をさらえる。新しいふんどしを締めた者が1人、水をかぶって中に入り、ふたを抜いた酒だるにおけで汲み込み、外の者が運び上げる。片昼かけて行い、1晩井戸にふたをする。井戸の中に入った者には新しいさらしが贈られる。

〔大みそか〕　前もって1日がかりで作った注連縄を玄関・裏戸口・神棚・荒神・水神などの神々や船・諸道具に飾る。新わらを木立から買って作る。スダ（しだ）を上下に2枚ずつ付け、真中に裏白と腹を合わせた唐人干し2匹を下げ、お初穂（米粒）を入れたのしとだいだいをつける。注連縄に下げる魚をカケイオという。

お鏡は床の間の中心の皇太神宮に大きな1升もちを2段供え、金比羅様・エベス様などは小さいもちを供える。トンドもちは大きく、左手の花と天照大神の間にすえる。仏壇には中央に供える。鏡もちは2段で、まずささの葉と譲葉（ツルノハともいう）の上に小もちを3個三角形に置き、その上に第1段目をすえ、さらに小もちを3個置いて2段目を載せ、上にだいだいを置く。荒神様のみ3段である。船霊様・諸道具・自転車・井戸の外、商人はチギリ等にも供える。

歳暮は年の夜までに届ける。事業家は普段世話になっている家へ、網方は日ごろ網の世話をする人々や本船のブリッジにいる人等、それぞれの仕事の責任者の所へ贈る。酒・シャツ・反物等である。一般には足袋・草履・下駄が多い。

昼までに風呂を沸かし、年風呂に入る。「長病をした人は入られん」という。

年取りの飯をトシメシといい、昼の12時ごろ家族がそろって食べる。トシメシが終わると「年を取った」という。大家の主人は別だが普通は正月でも半麦であった。もっとも正月用の麦は特にきれいについていた。年飯の残りを正月に食べる。縁起がよいという。

年取りの晩は勘定で1～2時まで起きていた。夜は戸を開いておく。

氏神様にトシマイリする。年の晩から参って元日までいすわり、そのまま初もうでする。還暦と厄年の人が酒を上げるのでそれを飲みながら時を過ごす。

〔元日〕　正月の神については次のような言い伝えがある。「正月さんはどこから来た。扇山（竹の浦の山名）のふもとからナニュ（何を）持ってござった。うらじろの葉を持って、つるの葉（譲葉）に米のせて、まつるまつるござった」（米水津村報）。

元日には村の人達は必ず氏神様やお寺に参り、それから年始の礼を行う。「明けましていい春になりました。旧年中はいろいろとお世話になりました。本年もよろしゅうお願い致します。」とあいさつする。「ごていねいにようこそお出になりました。」と答え、3つ組の酒に

外科・胃腸科
大塚外科医院
医院長 大 塚 正 年
大分市新川バス停横　TEL ㊱1122

数の子・田作が添えて出される。そのまま立つ客もあるが、好きなのは杯で３～４杯きこしめして、次の家に回る（米水津村報）。　元日には部落内の付き合いで年始に回る。

元日は飯を炊かない。正月３日間は毎日ぞうにを作って神だなに供える。仏様には焼もち一つに砂糖を載せて供える。ぞうには下地に、ぞうにの菜っ葉として白菜・ねぎを入れるだけでもちが主である。オクチ（小浦のことを宮野浦の人がいう。小浦の人は宮野浦をムカイという。）はグドーリといって里芋など野菜を沢山入れる。昔はよく食べていたので、一軒が50、多い家は80～ 100個入れ、１人で25個も食べる人があった。

機帆船の乗り初めは元日に行う。

元日は戸をあけない。ほうきを使うなといい、ほうきあつかいができんから子供に物を散らさないよう注意する。

〔２日〕　漁船の乗り初めをする。湯を沸かして「若風呂」に入る。

〔４日〕　福入りぞうすいを食べる。だしを入れ、ねぎ・にんじん・ほうれん草など野菜を２～３品使う。

〔６日〕　「６日年」という。オナゴシは髪を結い直し、懇意な家に集まり、三味線や太鼓をたたいて楽しむ。男はワケーシ宿に同志が集まる。やがて男女が合流して歓談した。嫁女盗みがよくあった。前の晩ににわとり・ねぎなどごちそうの材料をこっそり盗みに行き、隠しておいてこの晩に食べる。盗んだ里芋畑には「子はそれぞれに取り分けた。親を頼むぞコーシチドン(畑の持主の名)。」と紙に書いて竹の先にはさんで立てておく者もいた。

〔７日〕　七日正月。七草ぞうすいを炊く。シン（春）菊・ふだん草・大根・にんじん・玉ねぎ・さや豆など７種類入れる。現在でも作っている。これを食べると長生きするという。神だなに供えるが、仏様には別にご飯を炊く。

〔８日〕　蒲江の八日薬師に参る。船の中でさいころを転がしてばくちを楽しんでいた。若者はさいころが楽しみであったという。

豆知識

文化財愛護シンボルマーク

文化財愛護シンボルマーク

文化財愛護シンボルマークは、文化財愛護運動を全国に押し進めるための旗じるしとして、昭和41年５月に定められたものです。

このシンボルマークは、ひろげた両方の手のひらのパターンによって、日本建築の重要な要素である斗栱（組みもの）のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財という民族の遺産を過去、現在、未来にわたり永遠に伝承していくという愛護精神を象徴したものです。

〔10日〕　エベス祭り。「10日エベス」にはごちそうをして飲んで騒ぐ。相撲をやったことがある。

〔11日〕　「帳祝い」を商人がする。家で神仏を祭り、ぜんざい・豆飯を炊いて近所に配る。

〔14日〕　正月飾りを降ろす。夕方からトンドやぐらを組む。西は赤松新地、ハトは新宅の新地に組んだ。大きな家の門松をしんに使う。３階か５階のもので４階は悪いという。短い場合は継ぎ足して高さ５メートルくらいにする。注連縄・船松・神仏の花・鏡もちの紙などの正月飾りやお礼を積み重ね、その回りにすす竹を燃え易いように軸を上にしてうったてる。上部に旗を立てテープで飾り、必勝・人に負けるな・強い男になれ・字を上手にして下さいなど子供達の願い事を書いた短冊（立てるまでは人に見せない）をひもにつけて結ぶ。すす竹を他の組と奪い合うので警戒のため５～６人がトンドやぐらの中や外にむしろをかぶって寝る。

〔15日〕　早朝、暗いうちにトンドをはやす。午前３時ごろ、世話役の主人が「トンドシメスドー」と叫んで、トンドやぐらの内外に寝ていた子供を起こす。子供達は世話役の音頭で「トンドシメスドナー」と触れて回る。塩を振り神酒をホコウて、部落繁栄・大漁を口の中で祈願し、東口から火を付ける。正月の神様に供えたトンドもちを竹を割ってはさみ、根本をひもで結んで落ちないようにして焼く。トンドでもちを焼くことを「もちをハヤス」という。ハヤシたもちを持帰り、切ってかゆに入れてもちがゆにする。もちがゆに茶をかけて食べると中風になったり、人中に入って顔が赤うなるという。トンドは昭和10年ごろまでやっていた。

小浦では現在も続いており、正月10日に小学校６年以下の子供達が袋を持って、午前中にトンドのもち・米・金を集めて回る。昼間子供達は宿に集まってぞうに・五目ずしを母親といっしょに食べる。宿は部落内の各戸がマワリコ（順番）で勤める。ぞうに・五目ずしはこの日集めたものを材料にしてオナゴシが作る。14日にジゲのワカイシが浜にトンドの柱を立て、トンド小屋を作ってくれる。トンドの柱は長さ５間ほどのひのき材である。ウラ（先端）に滑車を付け、三方に綱を張る。綱に日の丸や五色の旗を付ける。日の丸は三尺角の布製で、１年間に生まれた男児の家が祝う。破れるまで掲揚するので中学生のものがある。柱を中心にして四角にくいを打ち、すすはき竹を山形に立て、一方に入口を作る。夕方、子供達は小屋に集まって豆腐じるを炊いて食べる。その後、夜の12時ごろまで他のジゲとすすはき竹の奪い合いをする。元気な子のいるジゲが多く集めることができた。潮が引くとすすはき竹を海辺で焼く。トンドの火にあたれば１年中サカシイ（健康）という。トンドの柱は16日（氏神である粟島神社の祭り）まで立てておく。

〈アンケート〉

大分県を代表するものは何か？

1位　石仏と石造文化　　2位　別府温泉をはじめ湯布院などの温泉群
3位　久住、祖母など九州の屋根と高原、秀峯

評論家の大宅壮一氏は大分県を〝日本のスペイン〟と評した。これは大分の県民気質をいったものと思うが、スペインというとそのひびきだけでいかにも情熱的でカッコイイが、実はあきやすく、さめやすい性格とか、孤立的、利己的、排他的であるなど、短所の面を多分に例えて言った言葉の様である。

しかし大分県民だって他県に比べていい面もあるはずだし、誇れるものは他に景勝や産物、文化財など沢山あるはずだ。しかし大分県民はある面でひかえ目な気質をもっているためか、いままであまりいい面を吹聴していなかった様な気がする。

これからの大分県人は大分県のためにも大分の長所をお互いに見出し、つくり出し、そしてＰＲを大いにすることが必要だと思う。特に自然や文化財については全県民が強い関心を持ち、自信を持って言えるようにならなければいけないと思う。

近い将来、大分県にも芸術会館や総合博物館などが出来ることになっている。こうした美術館、博物館については各県ともその県の個性を十分生かし、県の特色をイメージアップしている。又そうすることが地方における美術館、博物館の大きな意義でもあると思う。

さて、そう考えた時、大分県が他県に誇れるものに何があるか？今回はこのことを下記の様なアンケートで調査をしてみた。（アンケート用紙は 100枚印刷、県下各地区に配布、回収したもの52枚、回答してくださった方々は中津、宇佐、豊後高田、杵築、別府、大分、佐伯、竹田、日田地区の公務員、教員、会社員、商業、酒造業、海運業、医師、画家、工芸家、デザイナー、舞踊家、主婦など）

〈問１〉みなさんもご存じの様に
大分県は昔から大自然にかこまれ、美しい風景とすぐれた歴史、文化のかずかずを持っています。昔農業県といわれた大分県も近年は工業が盛んになり、今では農工併進の県政が行われています。しかし〝大分県とは一体何だろう？〟と聞かれても一口では言葉に出てきません。　大分県が他県に誇れるものは何だろうか？アナタが考えている大分県、アナタが感じている大分県を書いてください。つまり大分県を代表するものには何があるか？ということです。
（　　）

〈問２〉もしその内容を明快な言葉で言いあらわすとすれば？例えば「緑と太陽の○○県」「神話の国○○県」などの様に……
アナタの考える大分県のキャッチフレーズをお書きください。
（　　）

集計の結果、〈問１〉で最も多かったのは① 石造文化 に関係する文、文字、言葉が23、例えば・石造物にあらわれている仏教文化、・日本一の規模と優美さを誇る石仏群・石造の遺物・石造文化の里・県下に散在する磨崖仏・国東半島の遺跡・国東の石像・臼杵の石仏・点在する大小の野仏など。

次は② 温泉 に関する文19、例えば・世界一の湧出量を誇る別府温泉・湯の町別府とその背景・別府、湯布院をはじめとする県下の温泉群、など

次は③ 山 に関する文18・久住や祖母、傾山系の九州の屋根と高原・祖母、傾の原生林・高原とハイウェイ・由布、鶴見、高崎の景観・豊後富士・耶馬渓と青の洞門など。

その他をあげると、・吉四六ばなし、・豊後梅・かぼす・切利支丹文化・竹工芸・大友宗麟・宇佐神宮・耶馬台国・豊後浄瑠璃・しいたけ・臨海工業地帯・高崎山の猿・豊後牛・小鹿田焼・城下かれい・荒城の月・三浦梅園、帆足万里、広瀬淡窓、明治の福沢 諭吉・宇目の歌げんか、など。

回収された52枚のアンケートの中から次の各氏の文を参考までにあげてみると

・Ａさん　大分市　公務員　女

臼杵の石仏など大分県の石仏の量と規模の大きさは他県ではみられない。大分県だけのものである。

・Ｂさん　大分市　教員　女

他県を旅行して大分県に帰って来た時、最もなつかしく、「これこそわが県だなあ」と思うのは、湯煙りのたちのぼる湯の町別府の全景である。由布、鶴見、高崎の山々を背景に別府湾を前景にした別府の景観はまさに生きた名画といえよう。

この姿こそ大分県のシンボルであると思う。

・Ｃ氏　大分市　会社員　男

九州の屋根久住山、祖母、傾の原生林そして高原を走るやまなみハイウェイ小田の池、山下の池、盆地を通りぬけて温泉郷へ。大自然の美しさを満喫し、身近にそのふところへ静かに入ることのできるのも大分県ならでは……九州の北海道がそこにある。

・Ｄ氏　日出町　教員　男

大分県の久住山系、鶴見岳、由布岳を中心としての温泉湧出量は世界一と言われている。大分県が世界に誇れるものはこの温泉ただ一つであろう。

〈問２〉の大分県のキャッチフレーズについては、さまざまな表現のものがあったが、その中からわりとピッタリ、スッキリしたものを６つあげてみる。　（順不同）

・いで湯と石仏の大分県（大分市　公務員　女）・石仏文化の大分県（宇佐市　酒造業　男）・山と石仏と湯の里大分県（大分市　教員　男）・いきいきと太古のいぶく大分県（日田市　医師　男）・豊かな自然と野仏のふるさと大分県（大分市　無職　女）・吉四六さんの大分県（別府市　公務員　女）

しかしキャッチフレーズというのはむずかしい。一口でスッキリとした表現はなかなかできないものだ。けれども〈問１〉〈問２〉を通じてなんとなく大分県らしい線がでたのではないかと思っている。皆さんの考えはいかがですか？

今回のアンケートにご協力してくださった沢山の方々に心からお礼を申しあげると同時に紙面のつごうで全文を掲載することができなかったことを深くおわびいたします。

（Ｓ）

ニュース

豊後国分寺跡の発掘調査

豊後国分寺跡（大分市賀来国分所在）は九州の国分寺の中でも保存状況のよいことで知られているが未だ本格的学術調査はなされていない。近年の大分市郊外の急速な都市化の進行に対処するため、大分市教育委員会において今年度より国庫の補助を得て３ケ年計画で発掘調査を行い、この成果によって総合的な保存整備事業にとりくむことになった。

調査団は大分市教育長を団長とし、県内外の考古、建築歴史、地理等の各分野の専門家による委員会を組織し、その指導を得て、県文化課の職員３名が発掘作業を担当している。今年度の調査はその第１次調査として去る11月18日より12月５日にわたって行われ、塔跡の基壇石積みが確認されたほか、金堂とされている地点で33m×22mの壮大な堂宇の基壇が検出された。またこの北方に相ついで２つの建築遺構が検出され、今後の第２次、第３次調査への貴重な基礎資料が得られた。

はじめて民家の調査

生活様式の急激な変化と経済の成長にともなって、古い民家が急速に消滅している。学術調査に基づく民家の保存は、今日の急務とされている。大分県教育委員会は、46年度に民家の予備調査を実施した。明治10年以前の民家を対象にしたものであるが、約 300戸のリストアップができた。これを基に48年度、国庫補助事業による本調査を実施した。大阪工業大学助教授青山賢信氏を主任調査員に、大分工業高校教諭で県文化財専門委員の村松幸彦氏等の手によって進められた。佐伯市の疋田伝重氏宅、野津原町の後藤チドリ氏宅、山国町の神尾直治氏宅、日田市の広瀬正雄・草野義人・行徳素夫の各氏宅など、江戸期の保存すべき民家が県下にも所在することが判明した。近く報告書が提出されるが、民家の学術調査は、県下では初めてのことである。

文化財愛護少年団

「三ツ子の魂百まで」というが、文化財を愛護して行く少年団を、１市町村１団体を最小限の目標に、育成して行きたいものである。

県指定天然記念物の穴権現社叢を愛護している小学生の団体に「大白谷文化財愛護少年団」がある。国指定史跡臼杵石仏を中心に「臼杵磨崖仏深田愛護少年団」が、国指定史跡豊後国分寺には「国分寺史跡愛護会」が活躍している。無形文化財の継承を目的にした「北原人形芝居保存演劇クラブ」は有名である。地域の文化財全般を対象に活躍している「鶴城文化財愛護少年団」「あけぼの文化クラブ」等20団体が県下にある。

今年度中には、大野町・武蔵町・三重町にも新たな発足が予定されている。

文化財学習の入門書

文化財には、有形文化財（木造建造物・石造建造物・彫刻・絵画・工芸・書籍・考古資料）、無形文化財、民俗資料、記念物（史跡・名勝・天然記念物）等がある。これらへの県民一般の入門書が強く求められているが、県文化財専門委員の手になる大分県関係の新刊書は、次のとおりである。

※渡辺澄夫著「大分県の歴史」
（Ｂ６版・Ｐ344・山川出版社刊）
※賀川光夫著「大分県の考古学」
（Ａ５版・Ｐ400・吉川弘文館刊）
※染矢多喜男著「日本の民俗―大分―」
（Ｂ６版・Ｐ282・第一法規刊）
※岩男順著「大分の磨崖仏」
（Ｂ５版・Ｐ186・九環刊）
※中野幡能著「古代国東文化の謎」
（Ｂ６版・Ｐ258・新人物往来社刊）

大分県文化財専門委員

（アイウエオ順）

氏名	所属	担当分野	氏名	所属	担当分野
荒金 正憲	別府市教育委員会体育保健課	記念物（天然記念物―植物）	生野喜和人	県環境管理課	記念物（天然記念物―植物）
入江 安親	県教育庁文化課	有形（建造物―石造品） 無形（無形文化財） 民俗（民俗資料）	鈴木 章	県観光休養課	記念物（名勝）
岩男 順	大分大学	有形（絵画・彫刻・工芸）	染矢多喜男	県立鶴見丘高校	無形（無形文化財） 民俗（民俗資料）
臼杵 卓三	県立舞鶴高校	記念物（天然記念物―地質）	中野 幡能	県立芸術短期大学	有形（古文書・書跡・典籍） 記念物（史跡）
小田富士雄	九州大学	有形（考古資料） 記念物（史跡）	藤原 一男	日本美術刀剣保存協会大分支部	有形（工芸）
賀川 光夫	別府大学	有形（考古資料） 記念物（史跡）	村松 幸彦	県立大分工業高校	有形（建造物―木造物）
小玉 洋美	県立別府青山高校	無形（無形文化財） 民俗（民俗資料）	山本 聴治	県環境管理課	記念物（名勝）
小林 晶	大分大学	記念物（天然記念物―動物）	渡辺 澄夫	大分大学	有形（古文書・書跡・典籍） 記念物（史跡）